

戦争をどう評価するか

ペ・キエフスキーは、祖国擁護のスローガンを「裏切的」なものと呼んでいる。われわれは、おだやかにつぎのように、彼に確言することができる、——**どんな**スローガンでも、それを機械的にくりかえし、その意味を理解せず、事がらをふかく考えず、意味を分析しないで言葉をおぼえるだけにとどまる人々にかかると、「裏切的」なものになるし、またこれからもいつでもそうなるであろう、と。

一般的に言って、「祖国擁護」とはなにか？ これは、経済または政治等々の分野のある科学的概念であろうか？いな。これは、戦争の正当化を意味する、実にありふれた、一般につかわれている、ときにはまったく俗物的な表現である。それ以上のなにもものでも、まったくなにもものでもないのだ！ そこに「裏切的」なものがありうるとしたら、それは、俗物が、「われわれは祖国を擁護する」と言って、**あらゆる**戦争を正当化しかねないという点だけである。ところが、俗物根性に身をおとさないマルクス主義は、**この**戦争を、進歩的なもの、民主主義派あるいはプロレタリアートの利益に役だつもの、そして**この意味**で正当なもの、正しいもの等々とみとめることができるかどうかを検討するために、個々の戦争をそれぞれ歴史的に分析することを要求するのである。

人が、個々の戦争の意義を歴史的に検討する能力をもたないばあいには、祖国擁護のスローガンは、しばしば俗物的に、それと自覚しないで、戦争を正当化することである。

マルクス主義は、このように分析して、つぎのように言う。**もし**戦争の「真の本質」がたとえば外国の圧制を打倒すること（これは1789～1871年のヨーロッパにとってとくに典型的である）にあるとしたら、その戦争は、被抑圧国家または被抑圧民族については進歩的である。**もし**戦争の「真の本質」が、植民地の再分割、獲物の分配、他国の土地の略奪（1914～1916年の戦争がそうだ）であるならば——そのときは、祖国擁護うんぬんの空文句は「国民をまったくあざむく」ものである、と。

では、戦争の「真の本質」をどのように理解し、それをどう規定すべきであろうか？戦争は政治の継続である。戦争以前の政治、すなわち、戦争に導く政治、実際に戦争に導いた政治を、研究しなければならない。もし政治が帝国主義的なものであるならば、すなわち、金融資本の利益を擁護し、植民地や他国を略奪し抑圧するものであるならば、この政治から生じる戦争も、帝国主義戦争である。もし政治が民族解放的なものであるなら、すなわち民族的圧制に反対する大衆運動を表わすものであるなら、このような政治から生じる戦争は、民族解放戦争である。

俗物は、戦争が「政治の継続である」ことを理解しない。だから、「敵が攻撃した」、「敵がわが国土に侵入した」などということばかりにこだわって、戦争が**なにがもとで、どの階級**によって、**どんな**政治目的のためにおこなわれているかを検討しない。そら、ドイツ軍がベルギーを占領した。だから、自決の見地からいうと、「ベルギーの社会愛国主義者は正しい」。あるいは、ドイツ軍がフランスの一部を占領した。だから、「ゲードは満足できるだろう」、なぜなら、「問題が、当の民族（他民族でなしに）の居住する領土におよんでいる」から——ペ・キエフスキーがこう言うのは、まったく右のような俗物の水準におちこんだものである。

俗物にとっては、どこに軍隊がいるか、だれがいま勝利しているかが、たいせつである。マルクス主義者にとっては、いまの戦争がなにがもとでおこなわれているかがたいせつであって、戦争のときには、ときには一方の軍隊が、ときには他方の軍隊が勝利者となるものである。 第23巻 P26~27『マルクス主義の戯画と「帝国主義的経済主義」とについて』

1916年8月～10月に執筆

ポイント

俗物根性に身をおとさないマルクス主義は、この戦争を、進歩的なもの、民主主義派あるいはプロレタリアートの利益に役だつもの、そしてこの意味で正当なもの、正しいもの等々とみとめることができるかどうかを検討するために、個々の戦争をそれぞれ歴史的に分析することを要求するのである。

戦争は政治の継続である。だから、戦争に導く政治、実際に戦争に導いた政治を、研究しなければならない。もし政治が帝国主義的なものであるならば、すなわち、金融資本の利益を擁護し、植民地や他国を略奪し抑圧するものであるならば、この政治から生じる戦争も、帝国主義戦争である。もし政治が民族解放的なものであるなら、すなわち民族的圧制に反対する大衆運動を表わすものであるなら、このような政治から生じる戦争は、民族解放戦争である。

俗物は、戦争が「政治の継続である」ことを理解しない。だから、「敵が攻撃した」、「敵がわが国土に侵入した」などということばかりにこだわって、戦争がなにがもとで、どの階級によって、どんな政治目的のためにおこなわれているかを検討しない。

俗物にとっては、どこに軍隊がいるか、だれがいま勝利しているかが、たいせつである。マルクス主義者にとっては、いまの戦争がなにがもとでおこなわれているかがたいせつであって、戦争のときには、ときには一方の軍隊が、ときには他方の軍隊が勝利者となるものである。